第２章　学習意識, スキル

ここでは，グループ学習に対する児童生徒の意識とスキルの指導について示す。協同学習の考え方に基づき,「みんなで学ぶ　みんなが伸びる」という意識を指導し，その意識をベースに社会的スキル，対話のスキル，発言のスキル，説明・聴くスキル，協同的なグループ学習のルールを指導する。スキルは小学校 1 年から指導するとよい。小学校 1，2 年生は 2 人組のペア学習で実践し，3 年生からグループで実践するとよい。なお，ここで記載している指導事項は算数・数学に限らない。

1. 学習意識

(1)　協同の意識

グループにおいて，互いに学び合おうとするには，次のような意識を児童生徒がもつことが求められる。他者（メンバー）を気に掛ける意識，他者(メンバー)の状況や考えを肯定的・共感的に受け止める意識，つまずいている他者(メンバー)を馬鹿にせずつまずきに共感する意識，自分とは異なる考えに対してどちらが優れているかにとらわれず異なる考えを尊重し，違いから学ぶという意識などである。これらは協同の意識である（鈴木，2021)。なお，これらはグループのみならず学級全体にも当てはまる。

(2)　協同学習の原理・考え方

協同学習とは「生徒たちがともに課題に取り組むことによって，自分の学びとお互いの学びを最大限に高めようとする，小グループを活用した指導方法」（Johnson et al.,2002 石田他訳 2010,p.11）と定義されるが，グループ学習イコール協同学習という認識ではなく，協同学習は，次の 4 つの要件を満たすものとされている。4 つの要件とは，互恵的相互依存関係の成立，二重の個人責任の明確化，促進的相互交流の保証と顕在化,「協同」の体験的理解の促進である（関田・安永，2005)。こうした要件を満たすのであれば，協同学習はグループ学習のみならず全体交流や授業全体を指す（杉江，2011)。端的に言うと，協同学習の基本的な考え方は，競争や優劣ではなく，協同（同じ目標に向かって協力し合う）を主とした学習であり,「みんなで学ぶ　みんなが分かる」,「みんなで学ぶ　みんなが伸びる」という考え方であり,「仲間全員の成長を目指す」（自他共栄）ものである（杉江, 2011)。

(3)　児童生徒に指導する協同学習の意義

協同学習の意識を児童生徒に指導するにあたり，以下の①～④を指導するとよい。

①　互恵的な協力関係

・お互いに進歩することがお互いの喜びである。キーワード :「みんなで学ぶ　みんなが伸びる」
・分からない児童生徒は，級友に教えてもらうことで伸びる。
・教える児童生徒は，相手を理解させようと説明することで，自分の理解を深める。

②　2 つの責任

協同学習には，仲間を高めるために援助を尽くす責任と，仲間の援助に誠実に応える責任がある。
（杉江，2011, p.25）

③　肯定的・共感的な関わり

分からないこと，間違えることに対して，肯定的・共感的に受け止める。例えば，分からない児童生徒に対して,「～が難しかったんだね」と受け止める。誤答の児童生徒に対して,「～と考えたから間違えたんだね」「～まではいいよ。～から間違えたんだね」と受け止める。具体例はスキルの項目で後述。

④　違いを認め合い違いから学ぶ，分からない・できないに共感する

違いを認め合い違いから学ぶ，分からない・できないに共感することは下のように自他の進歩になる。

ア.「分からない」から学ぶ価値

分からない児童生徒に対して，その子にとってどこが難しいのか，どこが分からないのかを理解し，理解できるように説明することで，自身の理解を深めることができる。

イ.「誤答」から学ぶ価値

つまずきの内容を理解し，つまずいた相手が正しく理解できるように説明することで，自身の理解を深めることができる。

ウ.「異なる考え」から学ぶ価値

・自分とは異なる考え方を理解することで，見方や考え方を広げることができる。
・異なる考えの共通点や相違点を比較検討し，統合的・発展的に考察することで理解を深めることができる。
・表現の違いを比較検討し，表現のよさを学ぶことができる。

＜グループ学習の意識指導において教師が児童生徒に伝えることの例（一部スキル指導も含む）＞

「グループでは分からない子，分かった子，自分とは違う考えの子がいます。分からなければ説明をうけることで伸びます。自分と違うのならどこが違うのか考えながら聴き，質問することで理解が深まります。分かった子は，相手はどこが分からないのか，間違えているのかを把握したうえで説明することで自分の理解がさらに深まります。グループのメンバーみんなが関わり合うことで一人一人が伸び，一人一人が伸びることでグループが伸びます。グループが伸びれば，一人一人もさらに伸びていきます。

メンバーみんなが関わり合うには，気持ちが大切になります。分からない子や自分と考えが違う子を馬鹿にせず，「分かった？」「大丈夫？」「～が難しかったね」「～を直すといいよ」と声をかけることで，相手は話しやすくなります。また，声をかけられたら返事をしたり，うなずいたり，感謝の気持ちを伝えることで相手は話しやすくなります。教える人は相手が理解できるように精一杯教え，教えられる人は理解できるように精一杯聴くことでお互いに伸びていきます」

(4)　目指す授業像・グループ学習像を児童生徒が共有する

学習意識の意識向上や継続・改善を図るために，目指す授業像やグループ学習像を児童生徒が話し合い，自己評価やグループ評価をする活動を取り入れるとよい。グループ学習に対する自己評価やグループ評価の方法は第 5 章で扱うが以下に概要を示す。

①　目指す授業像・グループ学習像を話し合い，スローガンや目標をつくる

児童生徒が主体的に協同的なグループ学習に取り組むよう，目指す授業像やグループ学習像を話し合い，意識を共有するとよい。目指す授業像について話し合う中で，協同に関わったスローガンや目標をつくる。

スローガンや目標の例：「みんなで学ぼう，みんなが伸びよう」

＜指導例＞

□　振り返り，目標と目的の共有化

これまでの自分たちの授業やグループ学習の状況を振り返り，よい点と改善点を話し合い，目標と目的を共有する。

□　モデルを参照する

協同的な学習を効果的に進めている授業 VTR を視聴したり，モデル学級を児童生徒が参観したりして，自分達の授業をよりよくしていく上で参考にしたい点を共有する。

観察の視点

自分たちの授業に対する取組と比較する。

・グループでの関わりはどうか，どんなことに気を付けているのか。
・全体の話し合いでの関わりはどうか，どんなことに気を付けているのか。
・よい授業にするために，どんなことに気を付けているのか。

②　学習ルール（約束）を話し合う

目指す授業像を達成するために，どのようなことに気を付けたらいいのか，どのようなことに取り組んでいくのか話し合い，意識化と実践化を図る。学級掲示などで日々意識させるとともに，達成状況を評価させるとよい。

③　目指す授業像や学習ルール（約束）の達成状況を自己評価やグループ評価をして改善していく

評価は，毎時間でなくても単元単位などで行う方法もある。目指す授業像やグループ学習像に迫っているか，自己評価やグループ評価を行い，児童生徒が主体的に改善・向上していくようにする。また，グループ評価を持ち寄り，学級全体で共有することもよい。

2. スキル

(1)　社会的スキル

①　社会的スキルの必要性

社会的スキルを発揮することで，よい関係になり，あたたかい雰囲気の中で学び合うことができる。共感的な人間関係の中で，児童生徒はお互いのパフォーマンスを発揮し，自己肯定感や自己有用感を育てることができる。

②　社会的スキル

社会的スキルはよい雰囲気づくり，話しやすい雰囲気づくりに貢献することを児童生徒に伝え，次表のようなスキルを指導するとよい。

話し手	聴き手
・相手の表情を見ながら話す（アイコンタクト）。 ・相手の名前を言う。 ・謝る。感謝を表す。 ・相手の状況や考えを受容したり共感的に受け止めたりする。 ・雰囲気づくりをする。 ・ルールに従う。等	・相手を見ながら聴く（アイコンタクト）。 ・うなずく。 ・返事を返す。 ・自分の気持ちを伝える。 ・謝る。感謝を表す。 ・相手の説明を聴き，その後で自分の意見を言う。間違っているからといってさえぎったりしない。 ・相手の考えを肯定的・共感的に受け止める。 ・分からない，できない，誤りを共感的に受け止める（受容）。 ・相手を称賛する。励ます。 ・雰囲気づくりをする。 ・ルールに従う。等

補足）表は Johnson,Johnson,& Holubec.2002 石田他訳 2010；Johnson,Johnson.1996 石田他訳 2016；原田，2009，p.221 より筆者が抜粋したものである。

上表で示した社会的スキルはペア・グループ学習において行うだけでなく，全体の場での発言においても行うようにする。発言者にアイコンタクトをおくったり，発言にうなずいたり，首をかしげたり，返事を返したり，「なるほど」「すごいね」「いいね」等の称賛の声を出したりすることを指導する。

発言に対して「いいです」「賛成です」と反応を返すことが指導されている場合があるが，発言が不十分な場合でも「いいです」と返している場合がある。教師は，発言内容が不十分であったり，その発言を聴く側の児童生徒がよく理解していないと判断したりした場合は，「今，○さんがいったことは本当にいいんですか」「今，○さんが言ったことが理解できましたか」などと切り返すことが必要である。

③　肯定的・共感的な聴き方（関わり方）

下のような言葉が遣えるように指導するとよい。

ア　間違えた相手，分からない相手に対して

肯定的・共感的な言葉が遣えるように指導する。

＜例＞

「～と考えたんだね」
「～まではいいよ（あってるよ）」
「～が難しかったんだね」
「～が分からなかったんだね」
「～のところはがんばったね」
「～と考えたころがすごいね」
「～と直したらよくなるね」　等

イ　自分とは異なる考えをした相手に対して

どちらが優れているか優劣に拘るのではなく，相手の考えのよさに目がいくように指導する。

＜例＞

「○さんは～と考えたんだね」
「～と考えたところを私は気付かなかったよ」
「～と考えたところがいいね」
「～と考えたところが私と違うね」　等

(2) 対話のスキル

対話に依る相互作用の効果をあげ，グループのメンバーが関わり合う対話構造となる対話の方法として，“まず聴く”，“聴き手の反応や参加を引き出す”，“グループ全員に向けて話す”ことを指導する。

①　まず聴く

対話では，相手に説明することが主となってしまい，一方通行的な説明に終始してしまう場合がある。そこで，「どう考えた？」「分かった？」と“まず聴く”ことから始めさせる。そうすることで，未解答であった相手は「分からなかった」と言いやすくなる。また，相手に先に説明させ，聴き手は，自分の考えと比べながら聴き，説明を補足したり修正したりする。

＜例＞

A 児：どう考えた？分かった？
B 児：分からなかった。
C 児：どこが分からなかった？難しかった？
B 児：～が分からなかった。
D 児：じゃあ，そこを説明するね。

A 児：どう考えた？分かった？
B 児：分かったよ。
C 児：先に説明してみて。
B 児：(説明) …。
D 児：私は B 児さんと～までは同じだけれど，～は違って～となるよ。

② 聴き手の反応や参加を引き出す

説明は一方的に話すのではなく，段階的に話し，次表で示している「確認」,「問いかけ」をして，聴き手の反応を引き出す。聴き手は，話者から「～ですよね」(確認),「～までは分かりますか？」(「問いかけ」) と言われることで,「もう一回言って」「～が分からない」「どうしてそうなるの？」等と質問しやすくなり, そのことによって, 説明役と聴き役の交代が生じて, 相互作用に依る効果が期待できる (参考：第 1 章 1(1)①対話による相互作用　建設的相互作用)。

また，メンバーの発言状況をモニタリングし，発言の少ないメンバーがいたら発言を促す。その際, 話者が「次に，○さんが話してください」「△さん，聴いて分かったら今度は自分の言葉で説明してください」(「呼びかけ・巻き込み」) などと発言を促すようにするとよい。

＜聴き手の反応や参加を促す対話の仕方＞

確認	相手に確認を取りながら話す。 ～ですよね。 ～となることは分かりますよね。
問いかけ	問いかけながら話す。 ～まではどう思いますか？ ～までは分かりますか？
呼びかけ・巻き込み	メンバーの参加状況をモニタリングし，話し合いや活動への参加を呼びかけたり，巻き込んだりする。 次に○さんが話してください。 次に○さんの考えを聴こう。○さんどうぞ。 ○さん，この続きを言ってください。 ○さん，私の意見に繋げて言ってください。 ○さんもいっしょにやろうよ。
説明促進	相手の説明を精緻化するために，意図的に質問したり，相手に補足説明させたりする。 ～とはどういうことなのですか？（そこを詳しく説明するといいよ） どうして～になるのですか？（根拠・理由を説明するといいよ）

引用参考：石田・神田, 2015；鈴木, 2020

指導にあっては，話型にこだわるのではなく，自然な感じで対話のスキルが発揮されるようにする。

なお，上表で示した対話のスキルについては，ペア・グループ学習のみならず，全体で発言する場合も行うようにする。

③ グループ全員に向けて話す

グループ学習では, 話者は他のメンバーの状況を捉えながら, メンバー全員に向けて話すようにする。ペア学習においては相手を見ながら話す。4 人グループの場合，対話が 2 組のペアに分かれてしまうのではなく，話者 1 人に対して聴き手 3 人になるようにして，話者は 3 名を相手に話す（説明）ことで，聴き手 3 名から質問を受けたり，修正・補足意見を受けたりすることで，相互作用の広がりや深まりが期待できる。また，わからない・つまずいている相手に説明している対話を他者は自分の考え（説明）

と比べながら聴いたり，自分の考えに取り入れるように聴いたり，別の説明ができないか考えながら聴いたりすることが自身の理解を深める。（参考：第１章第１節(1)④　聴くことの学習効果）

◆　対話のスキルのポイント

○　段階的に説明し，説明の途中で「確認」「問いかけ」を用いて，聴き手の反応や参加を促す。

○　モニタリングして，「呼びかけ・巻き込み」を用いてメンバーの対話や活動の参加を促す。

○　グループ全員に向けて話し，メンバー全員が関わるようにする。

＜対話のスキルを発揮したグループの話し合いの例（A 児～D 児の 4 人グループの場合）＞

B 児　みんなどう考えた？（分かった？）＜まず聴く＞
D 児　僕は…までは分かったけれど後は分からなかった。
C 児　D 児さんは～までは分かったんだね。＜共感的な聴き方＞
A 児　じゃあ，僕が説明するね。～と考えたけれど，…まで分かる？＜問いかけ＞
B 児　うん。～と考えたんだね。＜肯定的な聴き方＞
C 児　分かるよ。
D 児　僕もそこは分かる。
A 児　次に，～となりますよね。＜確認＞
B 児　はい
C 児　分からないよ。
D 児　ぼくもそこが分からない。
A 児　じゃあ，～までをもう一回説明するね。～となる。分かる？C 児さん，D 児さん？〈問いかけ〉
C 児　分かった。
D 児　僕はまだ，分からない。
A 児　C 児さん，分かったなら，D 児さんに説明できる？　＜呼びかけ，巻き込み＞
C 児　～ですよね。ここまで分かる？D 児さん。＜問いかけ＞
D 児　～までは分かるけど，その次が分からない。
B 児　D 児さん，～と考えたら分かるよ。
D 児　分かった。～ということですよね。＜確認＞
A 児　はい。
A 児　次に，B 児さんが違う考えをしているからその説明を聴こうよ。＜呼びかけ，巻き込み＞
B 児　私は，～ということに気付いて考えました。～ということは分かる？＜問いかけ＞
A 児　そうか，～と考えたんだ。僕と違うね。＜肯定的な聴き方＞
C 児　ぼくもそこは気付いた。
B 児　じゃあ，C 児さん，～から繋げて説明してください。＜呼びかけ，巻き込み＞
C 児　B 児さんに繋げて言うと，～になる。これでいい？＜問いかけ＞
B 児　はい。
D 児　よく分からないから，もう一回説明してください。
A 児　僕が言うね。～ということだよね。B 児さん。＜確認＞
B 児　そうだよ。～まで分かる？D 児さん。＜問いかけ＞
・・・・・

注）上の事例は，後述する「役割設定・付与に依らない運営」や「話し合いの進め方」に依る。メンバー間の相互指名より話し合いが進む。

(3)　発言のスキル

発言のスキルは，グループ学習や全体交流で話し合いを深めるためのスキルである。

①　相互指名

児童生徒が相互指名をして意見交換を進める方法がある。グループ学習では，役割設定・付与に依らない方法をとるので，話し合いは相互指名によって進む。そこでは，先述した対話のスキルを発揮し，説明したことを聴き手が理解したか指名して確かめたり，説明を聴きたいメンバーを指名したり，自分の考えとは異なるメンバーを指名したり，発言の少ないメンバーを指名したりして話し合いを進める。

また，全体での話し合いでも，相互指名に依る方法では，児童生徒が他の児童生徒やグループを指名し説明を求め，自分達で話し合いを進める。ただし，児童生徒の相互指名に委ねるばかりではなく，教師が話し合いの進行をコントロールするために，指名に介入する必要はある。例えば，一部の児童生徒の話し合いに流れてしまわないように，「○さんの意見を聴いてみましょう」と挙手していない児童生徒を意図的指名したり，「○さんの意見をグループで確認してごらん」などと全体からグループに戻してグループで理解共有させたりする（グループトーク：第３章５参照）。

②　意見を繋ぐ

“意見を繋ぐ”とは，発言者は，前の発言者の発言内容に繋げる意見を言い，発言内容を深めていく方法である。繋げる発言には，説明内容を追加したり(拡張)，詳しくしたり(精緻化)，視点を変えたり（視点変更)，統合したり（統合）する意見がある。また，前の発言内容が誤っている場合や不十分な場合は「反対です」と，前の発言内容を否定するのではなく，その意見をよくしていこうとする立場に立ち，前の発言内容を修正したり補足したりする言い方をするとよい。こうした“意見を繋ぐ”という視点で発言をすることで，自分たちの意見でよりよくしていこうという話し合いがなされる。

ア　繋ぐ意見の視点や言い方

「○さんの～の部分に付け足しをして・・・」(拡張・補足)
「○さんの～の部分を詳しく言うと・・・」(精緻化)
「○さんの～部分を修正して・・・」(修正)
「○さんの意見とは別のことを言うと・・・・」(視点変更)
「○さんの～と△さんの～とは同じ考えで・・・」(統合)

イ　繋ぐ意見の留意点

・前の発言者の名前を言うとよい（社会的スキル)。
・誰の発言の，どの部分について意見を繋げるのかを言わせる。
・意見が途中で言えなくなった場合に「繋げてください」と言えばよいことを指導する。

ウ　挙手時の声やハンドサインとの併用（小学校）

小学校においては，挙手の際に，下表のように「繋ぎます」などと言って挙手する指導している学校がある。その際，挙手時に声に出すことが苦手な児童生徒もいることから，ハンドサインをつくり活用している場合もある。

発言の視点	言い方の例（主に小学校の場合）
繋ぐ	「繋ぎます」　「付け足します」　「続きを言います(代わりに言います)」 「詳しく言います」
質問する	「質問があります」　「詳しく言ってください」　「もう一回言ってください」
別の意見を言う	「別の意見を言います」 「直します」　　注)「反対」ではなく，「修正」という考え方に立つ。
まとめる意見を言う	「まとめます」

引用参考：鈴木，2020；石田，2021a，2021b

③　前に出て話す

全体で話し合う場面では，児童生徒が自分から前に出て，他の児童生徒と対面して発言させるとよい。その際，必要があれば黒板や掲示物を指し示したり，黒板に書きながら説明したりするようにする。前に出て対面することで教師に向かって話すという意識から他の児童生徒に伝える意識になる。

引用参考：石田，2021a，2021b

④　リレー発表

グループ学習では，メンバー全員が理解し，説明できるようにすることを目標に取り組む。このことをふまえ，グループの考えを発表する場合に，メンバー全員で説明をリレーのように繋ぎながら発表する方法(リレー発表)がある。ただし，リレー発表は，説明内容を分担して発表することが目的ではなく，全員が一通り説明できるようにして臨むことが大切である。リレー発表の発表順は，発言の苦手な子に配慮する姿があるとよい。なお，リレー発表は，グループとして最初に説明する際に用いて，質問に答える場合や追加説明の際には，メンバー全員が説明する必要はない。

なお，リレー説明には時間がかかるので，話し合いの時間を勘案して，リレー説明を行わずに教師がグループの誰かを意図的に指名したり，グループの代表に説明させたりする場合もある。

引用参考：石田・神田，2015

3. 説明・聴くスキル

(1)　説明のスキル

説明者の理解深化に繋がる説明のあり方の知見を踏まえ（参照：第 1 章 1 《1》③），以下の説明の仕方を指導する。

①　説明内容

・説明者は聴き手の理解状況を推測しながら説明する。
　先述した対話のスキル（確認，問いかけ）を発揮して，聴き手の理解状況を確認する。
・算数・数学学習において，説明では式や手続きの意味を説明する。特に，解法においてはどこに目をつけて考えたのか(目の付け所，アイデア)にふれて説明する。

②　相互的な説明構築

メンバーが相互に説明し合い，共に説明をまとめていく(構築する)。

③　援助要請・提供

・分からない，つまずいた相手に説明する（援助提供)する場合は，答えを直接示すより，ヒントや解き方を説明する。
・分からない，つまずいた児童生徒は，説明を受けて理解した場合，自分の言葉で説明し直したり，自分の力で解き直したりする。

(2)　聴くスキル

理解深化に繋がる聴く活動に関わる知見を踏まえ (参照 : 第 1 章 1 《1》④) , 次の聴き方を指導する。

①　説明者の理解深化に貢献する聴き方

・聴き手は，話者に対してフィートバックをする。
　先述した社会的スキルの発揮 (アイコンタクト, 返事) の他, 肯定的なフィードバック (うなずき，そうか，なるほどといった受容・共感の言葉等）や否定的なフィードバック（なんで，どうして，もう一回言って，分からない，そうなのかな？といった疑問，再説明要求，質問，批評等）を返す。

②　自身の理解を深める聴き方

・他者の意見を自分の意見と比較して聴く。
・自分の意見に取り入れるつもりで聴く。
・自分の考えを説明できるようにしておいて他者の意見を聴く。

(3)　説明・聴くに関わる指導事項

(1)，(2)で示した事柄について以下のように指導するとよい。

＜指導の例＞

「説明のときは，何所に目を付けて考えたか説明しましょう」
「説明のときはどうしてそういう式になるか説明しましょう」
「グループで説明をまとめるときは，誰かが一人でやってしまうのではなく，みんなで説明を補いながらよりよい説明をつくっていきましょう」
「分からない人に教えるときは，ヒントや解き方を説明しましょう」
「説明(発言)を聴くときは，自分の考えを比べながら聴きましょう」
「他の人の意見は自分の考えに取り入れるつもりで聴きましょう」
「ヒントや解き方を聴いて分かったら今度は自分の言葉で説明してみましょう」
「ヒントや解き方を聴いて分かったら解き直してみましょう。他のメンバーは正しく理解しているか確認(支援)しましょう」